

〔特別寄稿〕

日蓮・日隆の著作瞥見―日本漢語史の立場から―

猿田知之

はじめに

日本語史の研究分野にあつて、所謂「和語」の史的研究は盛んになされ、毎年貴重な成果が発表されている。ところが、列島に定着した「漢語」研究は些か手薄の感を払拭できない。筆者は、この数年、平安末期から中世末期の漢文資料を中心に、当期に使用された漢語、とくにランドマークとなる漢語の抽出に苦慮している。

中世漢語研究というと、禪宗の隆盛に注目して、禪家用語に集中しがちであつた。ある中世史研究者は「渡来僧の世紀」^{〔1〕}と呼ぶのも理由のあるところであろう。他方、入宋（元・明）に与ることの少なかつた他宗は、いかであつたか。漢語の列島定着を考えると、むしろ禪宗以外の宗派の文献にも目を向けるべきではないか、と考へるに至つた。

それではどのような視点から研究するか。さまざま方法が考えられるが、「反転漢語」から研究したら如何であろうか。「反転漢語」とは、筆者一己が呼称している用語である。簡単に説明すれば、次のようである。

「平和―和平」「保留―留保」といった二字漢語の前部要素と後部要素が反転した組み合わせをいう。(近年の中国学者の著作では「同素異序詞」^②と呼称するのが一般化してきた。)

一 日蓮遺文の反転漢語

『昭和定本日蓮聖人遺文』(一九七二年)を通覧すると、他の鎌倉期仏者の著作に見出せない漢語に遭遇する。小稿では、殊に「滅破」「留逗」を採り上げてみたい。この二語は大型辞典の『大漢和辞典』『日本国語大辞典』にあたっては出項されていない。また、現代中国における最も権威ある『漢語大詞典』(一九九三年)にも見出せない。『漢語大詞典訂補』(二〇一〇年)も出版されたが、残念ながらこれにも掲載されていない。反転漢語の「破滅」であれば、戦国期の『墨子』や漢代の『淮南子』に既に用いられ、列島では『貴嶺問答』(一一八五〜九〇頃)に姿を見せている。

「破滅」は他の文献にも見え、今日に及んでいる。ところが、「滅破」となると、日蓮の用例を除いて、目録遭遇するに及んでいない。

四部弟子・諸小国王・太子・王子乃是任持護三宝者転更滅破三宝(「守護国家論」、第一卷、一二六頁)^③

中国語史研究者張魏氏の『中古漢語同素異序詞』(上海古籍出版社、二〇一〇年)は、隋唐代までの反転漢語(一四一五例)を巻末に表示され、中国古代中古の状況を知るに便宜を与えてくれる。ただ、「破滅―滅破」は採録されていない。

日本資料さらに管見に及んだ朝鮮資料にも「滅破」に遭遇していない。日蓮遺文の「滅破」は一己の日蓮に

よって案出独創されたものなのか。もしそうだとすれば、曹洞宗の道元とともに、日本中世漢語史に特異な位置を占めることになる。ただ、前後の関係から、漢訳仏典の引用のように受け取れる。大蔵経の検索が容易になった今日、一度検索をお願いしたいところである。⁽⁴⁾

また、現代において、やや耳遠い漢語になってきたが、「逗留」はそれほど珍しい漢語ではない。ただ「逗留」の「逗留」となると、相当に漢字力がある人でも、はてこのような漢字があったものか、少し戸惑うことであろう。現今の辞書では「しんにゆう（しんによう）」がない「留」が一般的であるが、中国宋代の『資治通鑑』（一一〇八四年）・『統資治通鑑長編』（一一八三年）・『三朝北盟會編』（一一九四年）および『宋史』（一二三四五年）を例にとると、『統資治通鑑長編』のみ「逗留」が優勢で、他の三書は両字形が拮抗した状況にある。⁽⁵⁾ 朝鮮朝の『大東韻府群玉』⁽⁶⁾ 卷八、「十一尤」部に両字に「しんにゆう」を付した例が収録されている。ただ時代が下がるに従って次第に画数の少ない「逗留」に落ち着いたようだ。何故に「逗留」か。それは、おそらく簡便性よりも、視覚的な形に美しさを優先する所謂「部首揃え」によったものであろう。

さて、「逗留」は、『昭和定本日蓮聖人遺文』第二卷所収の『撰時抄』に収録されている。

或は彼の経々に留逗のみならず彼経々を深く執するゆへに（一〇五七頁）

この「留逗」は、たんなる「逗留」の誤記として考えてしまつてよいだろうか。日蓮がそのように書したのであるから、なにか深意がありそうに思われてならない。即断せずに、すこしくペンディングしておくのがよさそうである。

二 日隆のキーワードを探る

日隆（一三八五～一四六四）著作として門外漢にも知られているのは『日蓮宗宗学全書』第八卷（山喜房仏書林、一九六八年）の『私新抄』であろう。一読すると、次のように「要枢」の多用が顕著である。

観心ノ要枢（二八二頁）

法華ノ要枢（二九九頁）

一家円宗ノ要枢（三六八頁）

今経ノ要枢（三七三頁）

広宣流布ノ要枢（三八五頁）

このように頻用しているのは、なにか日隆教学を投影するキーワードと考えて、一考する価値があるのではなからうか。

さて、この「要枢」の反転漢語「枢要」は同書中にみいだせないものの、日本漢語史からすると、「枢要―要枢」が、列島内でのようであったか、その経過をトレースしたくなる。

『日本国語大辞典』（第二版）は、出典の初出文献を示すことに意を注いでいるので、漢語などの初出時代を知るには便利である。文献的には、「枢要」は、『続日本紀』延暦九年（七九〇年）であるに對して、「要枢」は一〇六〇年頃成立の『本朝文粹』にみいだせる。「要枢」の出現はだいたい後発となる。筆者がこれまでの目録資料を年代順に一覧化すれば、次の通りとなる。

枢要

続日本紀（延暦九年十日）

・
・
・
・
・

夢窓国師語録（大正新脩大藏經八〇卷、以下大正と略記する）

乾嶺和尚語録（同上）

竺遷和尚語録（同上）

花園天皇宸記（二卷一四三頁）

黄龍十世録（龍山得見、五山文学新集三卷二四二頁、以下新五と略記する）

義堂和尚語録（大正八〇卷）

空華日用工夫略集（蔭木英雄『訓注空華日用工夫略集』思文閣出版、一九八二年、三六九頁）

天隱和尚文集（新五、五卷七七七頁）

補庵京華集（新五、一卷七七六頁）

碧山日録（大日本古記録、上巻八八、一二五頁）

碧巖大空抄（禪門抄物叢刊、六巻一〇一、一〇三頁）

禅林類聚撮要抄（万安英種（一五九一〜一六五四）同上、六巻四五五頁）

平安初期から夢窓（一二七五〜一三〇一）までに大分間隔があくが、これは当方の調査不足に因るにすぎなく、いずれ補填も可能であろう。朝鮮資料を調べると、『高麗史』（一四五一年成、国書刊行会、一九七七年）に「職掌枢要」（三冊一五八頁）と『東文選』（一四七八年成、学習院東洋文化研究所、一九七〇年）の「擢居枢要」が見出せ

日蓮・日隆の著作瞥見―日本漢語史の立場から―（猿田知之）

る。

一方、『日本国語大辞典』では、一〇六〇年頃の『本朝文粹』を「要枢」の初出としているが（橘直幹、「一朝之要枢」、管見でもそれを遡る例に遭遇していない。「枢要」同様に一覧化すると、次のようになる。

要枢

明衡往来（日本教科書大系、古往来（一）、二八八九頁）

參天台五台山記（『新校參天台五山記』上海古籍出版社、二〇〇九年、六三〇頁）

興禪護国論（『中世禪宗の思想』所収、岩波書店、一九七二年、一一六頁）

消息詞（菅原為長、古往来（二）、三八八頁）

正法眼藏（道元、岩波文庫三冊四三〇頁、四冊二一・二二五頁）

興禪記（無象静照、新五、六冊六三二頁）

濟北集（虎関師鍊、五山、一冊六六頁）

後宇多天皇遺告（鎌倉遺文三七卷、一八七頁）

五辻清顕書状（南北朝遺文、関東編二、一四〇、一八五頁）

拾遺集（日本教科書大系、古往来（二）、五二五頁）

十二月消息（同上、古往来（二）、三三三頁）

神皇正統記（岩波文庫、一〇三頁）

私新抄（日隆、一三八五～一四六四）

文明本節用集

実隆公記（五上―一二六頁、九―二五九頁）

四河入海（笑雲清三、抄物資料集成三卷、二冊五〇―二頁）

石山本願寺日記（天文八年、六三頁）

天正本太平記（日本古典文学全集〈小学館〉一冊二〇―二頁）

通覧して気づくのは、「枢要―要枢」を同一書において両用している文献資料が見当たらないことである。なにか両語に位相差があるのか。やはり中国文献を渉獵する必要がある。さきに紹介した『大漢和辞典』・『漢語大詞典』の出典文献のほかに加上する文献は多くない。中唐の詩人韋応物（七三七―七九三？）と、ほぼ同時代の李鼎祚の『周易集解』（中華書局、二〇一九年）巻十四に、

崔憬曰、（中略）言辭、人之枢要（四五〇頁）

が、新たに加えることができる。また、『碧巖録』の本則（第十二則、洞山麻三斤、同文が第十五則にもある。五代頃の禪家羅山道閑の語）として、

垂示云、殺人刀、活人劍、乃上古之風規、亦今時之枢要。（岩波文庫上巻、一八二頁）

が仏家の著作にみえる。出典は大慧宋杲（二〇八九―一一六三）の『正法眼藏』のよし。

文人蘇東坡（一〇三六―一一〇二）の『蘇軾文集』（二冊四三〇頁、中華書局、一九九〇年）にも、「枢要之務」がみえる。同じ宋代成立の『続世説』（全宋筆記二編、大象出版社）、『墨客揮犀』（唐宋史料筆記、中華書局）も更に加わる。朝鮮朝の資料にも、『高麗史』（三冊一五八頁、四二五頁）、『東文選』（四冊二五三頁）に採録できる。一方、「要枢」を目睹することが少なく、『資治通鑑』（中華書局、一九九五年、全二十冊）でも、僅か一例（十六冊、卷二二九、七三九八頁）に過ぎないようだ。明代に至って『明文授讀』（下巻、卷三三、七二三頁、汲古書院、一九七二

年)に一例をみる。中国古典語の特色として、所謂 configuration が緩やかで、反転漢語が許多創出される特色がある。ただ時代が下るに従って反転漢語数も減少して、語形が固定化する傾向に至る。固定化する言語的要因は、「二字漢語は声調順に配置される」という主張が、中国語学において定説となりつつある。即ち中国語の声調、母音の「a」を例にとれば、第一声 (ā)、第二声 (á)、第三声 (ǎ)、第四声 (à) の順に配列されるという。「概要」の「shū yào」のほうで、「概要」の「yào shū」より中国語の発音にはきわめて馴染みやすいと、言うわけである。

このように一覽化すると、同時期の中国・朝鮮・日本の「概要」「要枢」の分布と拮抗の様子が浮かんでくる。まず中国では、「概要」「要枢」の両語が存在していたが、「要枢」は「概要」に対抗できるほどにはならず、用を得るのがすくなくなっている。一書のうちに併存するのを探し得るのが希少のようだ。⁷⁾

因みに中国近代漢語を知るに、清末野史の集大成である『清稗類鈔』(一九一六年成、中華書局、一九八四〜一九八六年、全十三冊)を調べてみると、「概要」が三例(一三一八頁、四六四一頁、五一四六頁)を採録できたが、「要枢」をみることはない。現代中国でよく使用されている『現代漢語大詞典』(商務印書館、第七版、二〇一六年)には「概要」は出項されているが、「要枢」をみない。現代韓国の状況は詳しくはないが、李熙昇編『ハングル大辞典』(原題『국어대사전』)の複製、三修社、一九八六年)を参照すると、「밀요(概要)」も「요밀(要枢)」ともに出項されていない。

このように中国・韓国における「概要」「要枢」の様相変化をみた。日本中世以降、どのような推移をみたであろうか。興味あるところであろうが、時代をだいたい遅らせて観望すると、筆者には「概要」が「要枢」を圧倒していったようにみえる。その意味で、久米邦武(一八三九〜一九三二)の『特命全權大使米欧回覽実記』(一八

七八刊)の「要枢」(岩波文庫四、卷七八―三四六頁)こそは、まさに棹尾を飾ったと言えるのではなからうか。それにしても何故に日本中世において「要枢」が中国・朝鮮に比して多出したのであるうか。ここに疑問が残る。

上記紹介の『南北朝遺文』の五辻清顕書状(興国二年四月二十日)に「尤可為要枢候」、その後続く文書に「為当国要枢者」とあるのが、解決の糸口があるのではなからうか。つまり文書用語に用いられるほどに、日常卑近となっていたのが、「要枢」であったのではないか。さらに往来物の殆どがまた「要枢」であることから、言語学用語というプレステイジ(Prestige・威信⁸)を考慮にいれてはどうであろうか。即ち「枢要」は、中国戦国期の『荀子』富国篇、正名篇以来の、所謂「典故語」である。ところが「要枢」は現在知られている初出は中唐の詩人韋応物の八世紀で、その出現は大分遅れ、威信性においては劣ることになる。しかし、潜在的に付加された価値が伴い、その語を使用することで共同体の連帯を反映する機能がある。卑近性やある共同体の連帯性が含意されたのが「要枢」と考えてはどうか。殊に日隆の「要枢」には、その傾向が濃厚に漂っている。

結びにかえて

日本中世漢語研究において、渡来僧がもたらした当代中国語、日宋・日元・日明交流によって舶載されてきた中国典籍、典籍の講義(抄物)、さらに五山僧を主とした五山文学作品、それに加えて中世期に成る古記録など多方面の資料渉獵が要請される。筆者は「浩として煙海の如」き文献の森を流浪してきた。たまたま機会を得たので、嘗て採録したノートによって、このようにまとめた次第である。しかし馬齢を重ねても、ますます「道遠

し」の感がうたた強くなる。本来なら再度資料に当たって点検すべき箇所も多かるうが、当方の都合でそれもかなわぬことになってしまった。

注

- (1) 村井章介著『日本中世の異文化接触』二二四頁 東京大学出版会 二〇一三年
- (2) 「同素異序詞」を使用している近年研究書
徐時儀著『朱子語類詞匯研究』上海古籍出版社、二〇一三年
馮青著『朱子語類詞研究』中国社会科学出版社、二〇一四年
張鳳麗著『碧巖録複音詞研究』の序文(董志翹) 世界図書出版広東有限公司 二〇一六年
周文著『宋元話本語言研究』暨南大学出版社 二〇一七年
李振東著『太平經与東漢确訳仏教複音詞比較研究』黒竜江人民出版社、二〇一八年
- (3) 成稿時、「二乗作仏事」を引用したのであるが、当該書には真蹟がない由を大平宏龍学林長から御指摘を頂いた。適切な『守護国家論』に差し替えることにする。又、後引『私新抄』の「要枢」の五例も、すべて同氏が真蹟に確認されたとのことである。
- (4) 紀要編集員大平寛龍師の御助力を得て、大正新脩大藏經所収の『仏説仁王般若波羅蜜經』『仁王般若經疏』『法苑珠林』等に「滅破」の用例が存することが確認できた。記して深謝したい。中国・朝鮮・日本の「外典」では、「破滅」に比して頻用されることはなかったようである。
- (5) 曾昭聡著『明清俗語及所録俗語詞研究』(上海辞書出版社、二〇一五年)には、「逗留」用例が紹介されている。
- (6) 権文海(一五三四〜一五九二)、小田舎庵 二〇〇三年

(7) 大平寛龍師から次のような教示を得た。日隆著作には「典故語」としての「枢要」も『法華宗本門弘経抄』などに見出せるが、同一書に「要枢」「枢要」の両用されることはないようである。日隆には両語の使い分けが存していたことを示唆するようである。

〔編集部補注〕編者が筆者に伝えたのは『御書システム』の検索結果であることを追記しておきたい。(大平寛龍)
(8) Peter Hugo Matthews 著、中島平三・瀬田幸人監訳『オックスフォード言語学辞典』の「潜在的威信」項参照
朝倉書店 二〇〇九年

〔追補〕成稿後、『戦国策』(上海古籍出版社、一九八五年)に「滅破」が巻六、秦四(二三〇頁)に見出せた。従って、鳩摩羅什(三四四〜四一三)の『仏説仁王般若波羅蜜経』を更に遡る漢語であったことが確認できた。

〈キーワード〉反転漢語 同素異序詞 滅破 留逗 要枢

〔編集部付記〕

〈執筆者紹介〉

猿田 知之(さるた ともゆき)

早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修卒業。同大学院文学研究科修士課程(東洋哲学)修了。立教大学大学院博士課程(日本文学)単位取得。元茨城キリスト教大学教授。

編著書

『日本言語思想史』笠間書院、一九九三年。

井上宗雄・中村幸弘編『福武古語辞典』編集委員、福武書店、一九八八年。

日蓮・日隆の著作瞥見―日本漢語史の立場から―(猿田知之)

論文、多数。

猿田氏は私と大学の同級生ですが、日本語の研究に進み、独自の研究領域を開拓されました。徹底した実証主義で、理論の前に実例を挙げることを第一とし、多数の文献を渉獵してこられました。その中に日蓮聖人、日隆聖人の著述に対する見解もあり、日蓮門下では未知の分野の故に、今回、該博な研究の一端を披露して頂きました。私共の為に、大いに参考となると考えた故です。

(大平宏龍)